

奈良 いのちの電話

2018
春
第372号

特集

奈良いのちの電話 相談ボランティアに携わって

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

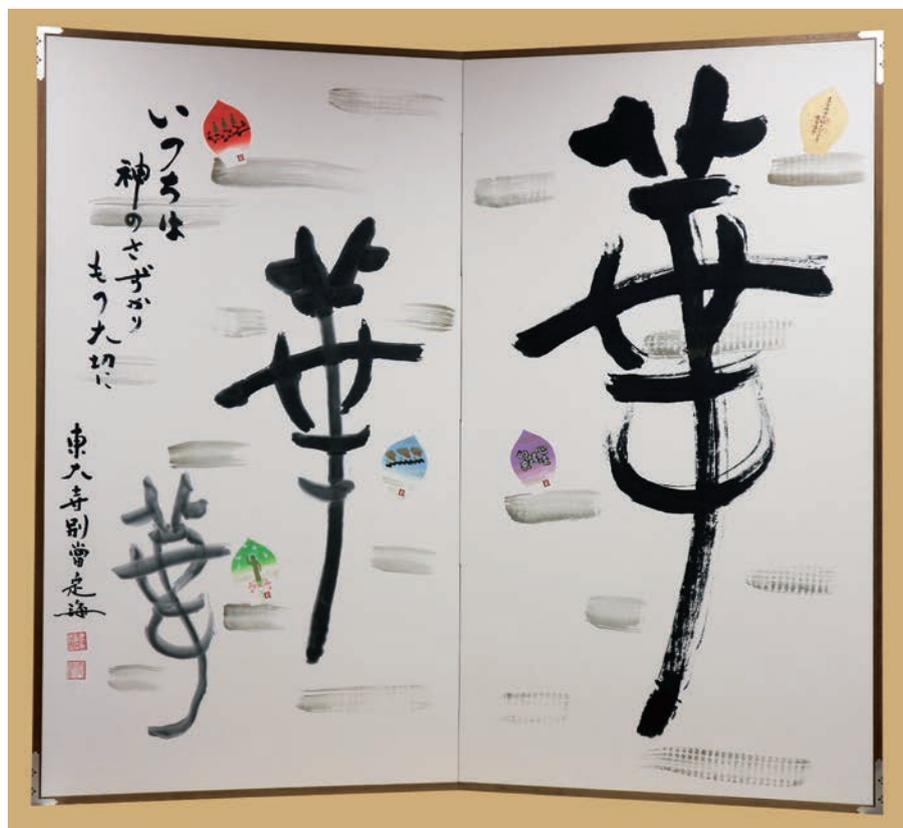
事務局/〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp



平岡定海 筆

散る花を 惜しむ心や とどまりて

また来ん春の たねになるべき

西行法師 (山家集より)

風鐸



人生には生老病死にまつわるさまざまな悩みがあり、それらを誰かに打ち明け、少しでも心を軽くしたいと願いますから、いのちの電話にはたくさんの泣き言があふれています。ところで、『樅の木は残った』などで有名な作家・山本周五郎の名言集『泣き言はいわない』は、泣き言をいわざるをえない人々の気持ちに寄り添ったうえ

で、「それでも、こう考えたらどうでしょう」と生きるヒントを示しています。例えば、「人間の一生には晴れた日も嵐の日もあります、どんなに苦しい悲惨な状態も、そのまま永久に続くということはありません。」そのとおりですね。

「心に傷をもたない人間がつまらないように、あやまちのない人生は味気ないものだ。」私たちは自分の取り返しのない失敗で、あるいは他人のせいで心に受けた傷に苦しみますが、「人間を高めるのは経験のありようではない。経験

からなにを学ぶかにある。」というようにその経験を人間性向上のチャンスにしたもの。そのとき、よい聴き手があると、自分の経験にじっくりと向き合えます。

「世間にはもっとおおくのほむべき婦人たちがいる、その人々は誰にも知られず、それとかたちへのこることもしないが、柱を支える土台石のように、いつも蔭にかくれて終わることのない努力に生涯をささげている。」この言葉は、いのちの電話に関係する人々に対する応援のメッセージでもあると思います。(彦)

特集



奈良いのちの電話

相談ボランティアに携わって



奈良いのちの電話は1979年11月に相談活動を開始し、来年には40周年を迎えます。長くこの活動が続いてきたのは、多くの方々の血のにじむような努力があったからこそです。その活動の原動力や相談ボランティアの意義などを、規定によりこの春定年を迎えられた方々にインタビューして語っていただきました。楽しくかつ意義深いお話がたくさんありましたので、広報係がその一部をまとめました。

奈良いのちの電話 はじまりの頃

奈良いのちの電話は、昨年亡くなられた植村圭子さんを中心とするメンバーがPTA活動でのカウンセリングの勉強会の中から、何か社会に役立つことに活かそうという気持ちで始められた。何もないところから起こすのは並々ならぬ意欲とエネルギーが必要だったことと思う。相談員1期生の募集は50名だったが120名集まった。何かしたい、何ができるだろうかという気持ちの人が多かった。そうして全国で8番目に、奈良いのちの電話が、住宅の1室を借り電話2台を置いて誕生した。最初から365日24時間体制でスタートしたのだが、1日に1本もかからない日もあった。活動がまだよ

く知られていなかったからである。新聞に載せてもらったり、地域集会を主催して直接訴えたり、さまざまな広報活動をして徐々に知られるようになった。

奈良いのちの電話の魅力

何よりここへ来るとほっとする。電話の中身は重いが、志を一つにする人たちとともにいると心が癒される。そしてすばらしい先輩・後輩との太い絆ができた。いろいろな人と接することで、思いを大切にすること、言葉にできない空気感を学んだ。仕事場でも家庭でもない自分の居場所がある、自分は電話を聴くためにここに来ているんだと思うことは、生きている意味を実感させてくれる。決してここにどっぷりというわけではなくて、むしろ世間が広がるという魅力もある。それまで専業主婦だったけれど、ここを基盤に福祉関係の仕事をはじめた人もいる。子育て支援のための「すこやかテレフォン」、子どものための「チャイルドライン」、自死遺族支援の「よりそいの会あかり」などの関連事業に関わることで、視野がひろがりさまざまな経験が出来る。また相談員は研修を重ねるので、自分を見つめ、勉強して自分を磨くことができる。

継続の原動力となったもの

相談する人によりよい援助ができるというのが原点だと思う。電話相談は時間を要するボランティアなので、家族や周囲の理解があってこそ続けられることだと思う。相談員の質を高める研修やシステムが、奈良いのちの電話はよく出来ている。また相談員をサポートする体制、守る体制も出来ている。苦情があった時にも、協会として対応してくれる体制がある。役員の人や先輩が「すまんなあ」「ありがとうな」などと声かけしてくれたことも相談員を続けてきたエネルギーになったと思う。ここには出会いと学びがある。これからも仲間づくりをしていってほしい。しんどさをみんなでき共有し、支え合うことが大切だから。



初代理事長 今里英三氏の額

相談ボランティアの意義

電話相談ではいろんなことが話される。心の問題、家族の問題、社会の問題、性の問題もある。こんな世界もあったのかと驚くことがある。そういう経験を重ねることで慌てなくなる。徐々に自分のひきだしが増えて、また別の相談で役立つことがある。例えていうと100%受容するのではなく、5%自分を残しながら聴くという柔軟性が身につくようになる。大事な時間を割いているのに性の電話を聞くのは嫌だという人もいるが、「性は生なり」という考えで、生きることとして捉えることも必要なのではないか。話の内容に拒絶反応を示すことがあっても、話し合っているうちに考えが変わるかもしれない。相談員の問題として乗り越えないといけない。東日本大震災の後、「震災ダイヤル」に参加したことは社会的意義が高いことだった。電話だから何もできないことがわかっていても、何か言いたくてかけてくる人に、電話で心に寄り添うことしかできないが、その気持ちが大事でそこに大きな意義がある。ボランティアは自分のためにもなる。「ボランティアは人のためならず」なのである。

いのちの電話の基本理念を守る

時代が移り変わっても人の悩みは変わらない。「いのちの電話」と呼ばれる相談機能への期待に応える対応力をより充実させなければ、その存在意義が曖昧になってしまう。「いのち」に寄り添うプレッシャーを意識しないといけない。行政とは違って、何時から何時ではなく、「いつでも」「誰でも」「どこからでも」電話をかけられるのがいのちの電話である。孤独な人が死にたい気持ちに突然なることもある。眠れないで夜中に誰かと話したい人もいる。そんな思いに寄り添い傾聴する。相談者優先がいのちの電話の基本であるから、相談員は研鑽を積まなければいけない。

相談員に伝えたいこと

ここで人の話を聴いていると世の中の動きがよくわかる。ここに関わっていなければ出会えない人との出会いがある。講師の先生方との出会いも自主研修会での出会いも同じだ。その出会いが次の自分を作ってくれる。今こうして生きている奇跡に感謝し、何かのかたちでお返ししていく、助け合って生きていく、それが人間だけでなく地球・宇宙をも守っていくことにつながると思う。植村さんは過去を振り返るのは嫌いで、時代も人も変わってきているが「たぶん今が一番いい」と思ってやるだけだと言っておられた。それは未来を見据えてのビジョンを持って今を生きるということで、私たちが持つべき姿勢なのではないだろうか。(広)

情報化社会のなかで考える

出会い 12

— 出会い・ふれ合い・離別の人生 —

奈良教育大学名誉教授

今井 靖親

私たち一人ひとりの命は、私たちの父と母の出会いから誕生したものです。誕生後から乳幼児期までは、こうした両親の生活環境の影響を直接受けて成長していきます。小学校に入学すれば担任の教師や友人との出会いがあります。優れた教師に出会えるのか、苦悩に耐えながら通学するのか、どんな級友に出会えるのか、それはまさに運や縁というレベルの出会いでしょう。

中学校・高校さらに大学に進学すると、教師と生徒あるいは学生との縁は、人の一生を左右するほどの出会いとなってきます。人間社会のさまざまな領域でめざましい業績をあげたすべての人が、卓越した教師・コーチ・先輩などの指導者との出会いから、その道の一流としての道歩んでいるのです。社会人になれば、様々な人間との出会いが頻りに繰り返されます。また、人間にとっては、自然災害や事故、事件などにより、生死をわける大きな出会いがあります。美しい自然環境やかわいい動植物との出会い、多種多様な「物」との出会い、今やネット社会では、直接顔を合わせず、音声による言葉の交換もない出会いが当たり前になりました。それによる喜びや悲惨な世界が拡大してきています。私たちはこうした人生の中で、いろいろな出会いを重ね、多くのことを経験し、学び、成長し、喜びや感謝の豊かな人生を過ごしたり、逆に支援の必要な孤立や引きこもり、果ては反社会的な非行や犯罪などの不幸な人生を歩んだりします。私たちは、運命的な出会い、貴重な縁を大切に、相互ふれ合いを深め、努力精進を積み重ねたいものです。

しかし、どのような出会いにも必ず離別があります。学校からの転校・卒業、転職や転居などからの別れ、出会った相手を受け入れられなくなったの離別、さらに病気・災害・事故・事件などによる死別によって、人は出会った人と別れていかなばならぬのです。いかなる権力者も、百万長者も、死は極めて公平に双方の実際の交わりを停止させ、離別させるのです。絶対的な離別のある、限りある人生。それぞれの人がその離別を悔いなく迎え、心満ちて一生を終われるように生きたいものです。